作庭塾庭守　活動報告

荒川　昭男

両使いの蹲踞

平成22年9月26日、都筑JAにて蹲踞講習を行いました。

既に講習した向鉢、中鉢の続きとして今回は、手水鉢を挟んで2石の前石を据える両使いの蹲踞を組みました。

両使いの蹲踞を組む理由は、まず第一に敷地内に複数の茶室があり、尚且敷地の広さの制約で、茶室ごとに蹲踞を組むことが難しい場合。

茶室の数にこだわらず、初めから延段や飛石を含めた両使いの景色を意図したとき。或いは、予算的制約がある場合。

更には、価値のある手水鉢を、より引き立たせる狙いがある等が考えられます。

道しるべによって蹲踞に奥行きがでる

一斑の蹲踞は、手水鉢に前回の中鉢で用いた、江戸時代の上野寛永寺に据えられていた小松の伽藍石を据え、海回りはあえて役石は据えず、守山石で丸く護岸を取りました。

前石は、丹波と甲州鞍馬を据え、海には筑波ゴロ太を敷きました。蹲踞までの道すがらは、白川の葛石と川石を組んだ行の延段や、鴨の真黒や引臼等の飛石を伝いとし、踏分けの前には、琵琶湖の小松石を彫り込んだ道しるべを立てました。この道しるべは、蹲踞までの奥行きを出すための近景的意味も持っています。守山石は、琵琶湖西岸の比良山を望む志賀町で採石されていましたが、現在では入手の難しい貴重な石です。地元滋賀県内は勿論、京都の主な有名寺院や町屋の庭で、堆積の層が美しく浮き出た守山石を良く見かけます。

日本は中国大陸の縁だった

今から1億2千万年前、現在の中国大陸の縁が京都や琵琶湖周辺まで伸びていました。日本海はそのときまだ存在していませんでした。

その縁にあたる海岸の浅瀬に、陸から流されてきた泥や粘土、そして砂等が堆積し圧力を受けて堆積岩となったのが守山石です。

8千万年前、現在の比良山やその南の比叡山あたりに、地球内部からマグマが上昇し地殻に貫入しました。そのマグマの熱を受けた堆積岩の一部が鴨の真黒石です。真黒石は熱変成を受けた接触変成岩で、岩石名をホルンフェルスといいます。

受けた熱の温度が500度から600度ぐらいだと、真黒石の中にボヤけた青白い斑点が見られます。この斑点を菫青石（きんせいせき）と呼びます。菫は「ねば土」とか「粘土」という意味です。京都の庭師さんは、この菫青石が見られる石を米真黒と呼んでいました。菫を米に見立てたのでしょう。

京都大徳寺北隣の今宮神社で、丁寧に磨かれた米真黒を拝見することが出来ます。

その上昇してきたマグマが早く冷え固まったのが、石英閃緑岩の京都鞍馬石で、ゆっくり冷え固まったのが、花崗岩の白川御影や小松御影といわれています。

石灯篭の「見立て物」

二班の蹲踞は、灯篭の基礎に水穴を穿った見立て物を手水鉢とし、海回りは小振りの木曽石で縁取りました。

手水鉢には、力強い複弁の反花が彫りこまれ存在感があります。

引臼を散らした木曽敷石から蹲踞へは、本鞍馬の飛石を打ちました。

鉢明かりは、六角の生込み灯篭を据えましたが、程良い高さに納まりました。

灯篭は、笠や中台の縁が薄く仕上げられ、特に笠の照りの上品さは、火袋に彫られた仏と相俟って、石幢の雰囲気を強く漂わせています。因みに石幢は中国の唐より伝えられたものですが、平安時代後期より起こった地蔵信仰と結びつき、室町時代に至るまで、日本各地で造られたといわれています。

年号が明らかな石幢で最も古いものは、室町初期の応永8年（1401年）丹後の長徳寺の八角石幢といわれています。

八角石幢は、現在京都山科の追分から、逢坂の関跡に向かって右側の月心寺という尼寺に納まっています。寺は車の往来が激しい国道1号線に面していますが、尼寺らしいやさしい構えになっています。石幢は見た感じ石灯篭に似ていますが、竿には中節がなく、笠には蕨手（わらびて）がありません。

また、灯篭の火袋にあたる部分を、石幢では龕部（がんぶ）と呼びますが、火口がなく六面に地蔵が彫りこまれています。龕部の二面に、火口が開けられ灯篭に見立てられたのは、桃山時代以降といわれています。

五輪塔や宝塔等石造品の残欠に、水穴を穿ち手水鉢に見立てられたのが、桃山時代と伝えられていますが、石幢の転用も時代が重なるようです。

控えめな灯篭が手水を見守る

降り蹲踞

11月28日都筑JAで、蹲踞講習最終として降り蹲踞の実技を行いました。

今回は、世田谷の豊前屋庭石店さんがお手伝いに来てくれました。

いつものように、講習に入る前に課題の内容を説明し、また内容とは別にいつものことですが、この講習は二度と経験することはないだろうとの、一期一会の気持ちを持って受けるよう話をしました。

その都度、一期一会の自覚を持てない人は、庭守で学ぶ資質に欠けていると私は思っています。

通常の蹲踞は、時々施工したり見かけもしますが、降り蹲踞は、造ったり拝見することが少ない形式です。京都大徳寺高桐院の降り蹲踞は、私達が拝見できる最も有名なものです。秀吉の家臣である加藤清正が、朝鮮に出兵した折に持ち帰った平城門の礎石を、袈裟形に加工し手水鉢に見立てたと伝えられています。また千利休と縁の深い、大阪堺の南宗寺実相庵の降り蹲踞も、袈裟形の手水鉢です。

京の町屋には、現在でも降り蹲踞がそこそこの数組まれているらしいのですが、個人のお宅では拝見することは難しいようです。中京区蛸薬師の「河道屋」というそば屋、あるいは上京区千本のすっぽん「大市」、また下京区島原の「角屋」等の降り蹲踞は、運が良ければ拝見出来ます。

そもそも降り蹲踞の意匠の意図は、手水鉢を囲み石積みや石段、また懸崖的な植栽等の模様がとれる為、景色が豊かになります。更に高低差をつけることによって、京の町屋のような敷地の狭い庭に変化が生じます。

人によっては、つくばったときに気持ちが落ち着くといいます。

当然庭の排水効果もあります。

石段の先にある糊臼の手水

再び世に出た白川のボソ

一斑の降り蹲踞は、多分江戸か明治時代のものであろうと思われる、灯篭の地輪を台石として、その上に水穴を彫りこんだ糊臼（のりうす）を手水鉢として乗せました。

台石として用いた地輪は、以前京都の下京で町屋の庭を造作したときに、既に3石あった中のひとつで、施主の話ですと前の庭工事の際、地中より掘り出されたものとのこと。かなり地割れた年代物に見えますが、石質が白川のボソなので、時代を正確に読むことはできません。

カメラ目線も含めた一班のメンバー

糊臼の背後には、独特の形をした木曽石の鏡石を据え、海の深さは55cmとし回りは筑波の石で積み上げました。左右の役石や石段脇の土止め等は、大振りの筑波石でまとめました。手水鉢までは、筑波、丹波、木曽の厚みのある石を用いて、曲のある変化をつけた石段としました。

今回の鉢明かりは吊灯篭にしました。30年程前、京都北野天神の骨董市で買い求めたものですが、古いものではありません。このような灯篭もあるという意味で用いました。

降り蹲踞という、滅多に経験できない仕事に皆さん戸惑いながらも、真剣に石と向かい合っていました。

木曽の大板が手水へと誘う

思い通りにならない石に苦戦する二班のメンバー

主を失った蓮華座

二班の降り蹲踞は、堂々とした鳥海山の手水鉢を用いて、豪快な鉢回りを組みました。手水鉢の水穴は、班長の川田さんがご自分で水穴を彫ったとのことです。

海は広くとり、その広さに合わせた大振りの木曽石で石段を決めました。

海回りの石積は鳥海山の石で積み上げましたが、やや大きめの石と小づめの石とのバランスが、上手にとれたと思います。筑波を用いて石積をした一斑同様、鳥海山の石積に皆さん真剣な面持ちで、悪戦苦闘していました。

鉢明かりは置灯篭としました。

天下茶屋形を細身にして、前面の格子を十文字とした創作灯篭です。

置き灯篭の台石は、先代が入手したといわれている蓮華座ですが、無縫塔或いは仏舎利、または石仏地蔵等の何が鎮座していたか定かではありません。

主が何だったかは、蓮華座に彫られた受け花のみが知るのでしょう。

今回の降り蹲踞は、深くて広い床掘りが必要なため、会員の内野君の小型ユンボが活躍してくれました。ありがとうございました。また石井農園さんが、いつものようにソヨゴやモミジ、その他潅木、下草、苔等を用意してくれました。合わせてお礼申し上げます。

次回の庭守活動報告は、平成23年1月の座学の内容や、2月の川合玉堂邸の池回りの護岸石積に関してお伝えします。

庭守に参加して

一造園土木㈱　松倉　仁

のっけから情けない話ですが　庭守りの翌朝は体がきつい　節々が痛い。飯どきに　箸が思うように運べない時もあります。こんなありさまは私だけかもしれませんが…。

庭守は　第四日曜日　朝八時に集合します。私は年長です　同世代が四、五名いますが　あとはみな若い人達です。各自多くの事情もあるでしょうが月末の日曜日に横浜農協同組合植木セリ市場に集まります。

講師の方々も何日も前から用意したことだろう　手水鉢　投石　石材　吊り具備品等々をクレーン車やトラック満載に荷造りして到着します。

ここは「何か…」がある。ただ　教える、教わるという空間だけではない緊張感が　回数を重ねるたびに上がっていくのが分かります。

それでも会長　荒川さんに「厭なら来るな、休むならやめろ。」と発破をかけられる。

それも解ります　現場作業は集中と緊張が欠けると大ケガもある　勘もコツもつかめない。講師の渡部さんも、川田さんも公私に亘る都合をつけ、ここに来てくれています。

「真剣味のない者は学ぶべからず」「頭を垂れ教えを乞う」素直な心を忘れるな。「技を磨く前に礼儀を学べ。」これらを胸の内に刻み　庭守の講習は始まります。

延段、蹲踞（向う鉢）、飛び石、燈篭、植栽、一日かけ一つの景を造り　地鏝で光らせ水打ちをして仕上げます。

講師の方の総評を聞きメモを取ったり写真を撮ったり　この時ばかりは皆笑顔　いい顔しています。それも束の間　片付けです、やっとの思いで据えた石も　悩んで積んだ石も綺麗に土を落として　使った道具はたわしで洗い　平らに整地して　全てを元に戻して終わります。講師の方々にお礼を言い　共に汗をかいた仲間にお礼を言って帰ります。

振り返ると　今ここに在った　延段、蹲踞、燈篭、築山、下草の景色は　幻の如し…です。

ここには「何か…」がある。それは「本気」と「一期一会」の心なのかもしれません。

㈲福田園　福田　範弘

三年前の春携帯電話が鳴った。それは荒川さんからだった。「福田君一緒に庭の勉強会を作ってもう一度学んでみないか」という内容でした。

そのとき私は「やりたいです」と答えました。今までこの様な勉強会の誘いが無かったので参加することを即決しました。最初の顔合わせの時は、私を含め10人程の方々でその中で顔見知りの人は二～三人で、あとの方は初対面でした。どのような職人の集まりなのか不安と期待の両方が錯綜しました。

最初の年は、私の会社の圃場で灯篭、蹲踞、役石の据付練習でした。朝から晩まで荒川さんの指導の下、鏡石をひっくり返したり、斜めにしたり、役石を何度もずらしたりする中で真剣な部分があったり笑いがあったりと楽しい講習会でした。

年が明けて新年度の参加者を募集したところ四十名以上の方々が入会されて大所帯になり二班編成で講習会、作業を行うようになり諸先輩方は、指導をするのが大変だったと思います。参加者の中には、石を触った事がない人までいるわけですから、セットウを使わせれば手に血豆を作っている人がいたり、竹割りで竹を割らせれば指から血を流しておりました。

そんな状況の中で指導をされているのが、荒川、川田、渡部さんの三人の方でかなりの強者で、良く勉強もされているし、長い経験の中で持っている技術・発想はものすごいと思います。

私自身が農業大学校卒業後保土ヶ谷の造園会社（白保園）に住込みで修業をしていた頃親方の技術。造園技法は、すごいと思っていました。

当時二十代前半で造園・技術・勉強よりも遊びに夢中だったのを思い出します。

それから二十年以上経った今、見た事も無いような年代物の石材を見て、触って組み立てる事が出来る会に参加させていただけたのは、光栄で且つ幸運だったと思います。この先このままですと日本の造園、伝統技法・職人が失われていくような気がします。この様な会に若い方が参加して学ぶ事が日本の歴史、文化を次ぎの世代へ伝えることになると思います。

私は、初心に戻って技術、センスをマスターして現場で力を発揮したいと思っています。

確かに今の日本の経済事情では、この様な技術を発揮する場が激減していますが、覚えた技術は荷物にならないし、いつかお客様からの依頼があった時は、自信をもって作品を作れると思います。

この十数年自分は、ねこ引き、穴掘り、コンクリート練りは会社の若い衆がやっていましたが、庭守では自分が汗をかいて泥だらけになって作業をしています。覚えようとする気持ちと、誰にも負けたくない気持ちがそうさせているのだと思います。

「終わりのない一生勉強の仕事です。」

石井農園　石井　新次

庭守への参加申込から2年が過ぎようとしています。初めての顔合わせのときに気づいたのは、若い方が大半で、自分はどちらかといえば指導される方々に年齢だけは近いことでした。

思えば、この仕事を始めて30年近くが過ぎ、はたして自分は何をしてきて、何が出来るのかをあらためて自問自答したとき、知らないこと、覚えたいことの多さに気づき、この勉強会に参加させていただきました。

庭守の指導者の方々は、単に技術を教えるのではなく、今入手できる最高、最良の石材・燈籠といった材料を使用し本物は何か問いかけ、歴史的な背景を伝え、なぜそうするのかを自分で考え、判断させるようにし、仕事に対する心構えから指導をしていただいています。仕事に対する真摯な態度は、私の仕事に対する取り組みにも影響をあたえています。

庭守への参加は、私に貴重な時間を与えてくれました。五十路を迎えた私にとって、自分の子供たちに近い人たちと同じことをするのは、身体的に少々辛いものがありますが、職人としての自分をより高めていくために、これ以上の勉強会は探せないのではと感じ、なぜ最初の募集から参加しなかったのかが悔やまれます。

会場の都合や教材の準備等、問題が山積みの中で、ご苦労も多々あろうと察しておりますが、指導される皆様の心意気に答えられるよう、よりいっそうの心構えを持って参加させていただきますので、今後ともよろしくお願いいたします。

旧川合玉堂別邸 池泉護岸石組 講習会開催

横浜マイスター
大胡　周一郎

旧川合玉堂別邸・二松庵に於いて、庭守の講習会が、荒川・川田渡部・石井各講師先生方の指導の下、二月六日（日）と十三日（日）の二日間行われました。

二松庵での講習会は、鉄砲垣、網代垣、竹穂垣建仁寺垣、土橋に続き六回目となります。

今回は垣根から離れて、池の護岸石積を行いました。

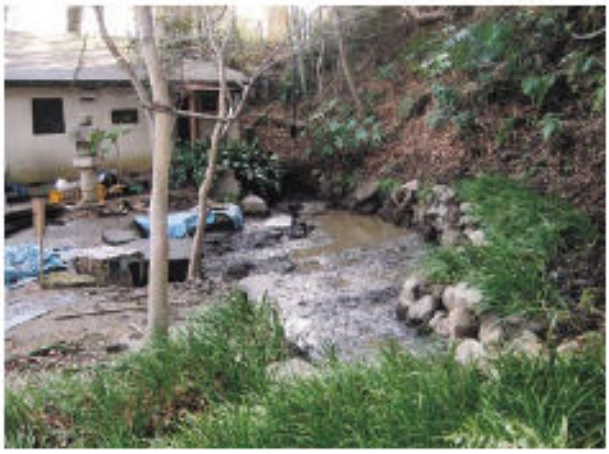
庭守では、今までに延段、蹲踞鉢前の石組等、石を使う勉強は何度もしてきました。しかし、今回は足元の悪い土堀の池の中での作業でもあり、苦戦いたしました。

池の常態は、手前半分は前石が据えられ護岸が整っていますが、対岸は長年手が入らず斜面の土がソレ込んで埋まりかけ、辛うじて仮設の乱杭を並べて土留めとしていました。それらを取り払い池底の泥を掬い上げ、湧き出す水を汲み上げつつ作業を進めました。周辺の景観や既存の石に馴染むよう、烏海山石を使用し積みました。

汀線に変化がでるように、また、様々な石積みの決まりごと等を考えて、講師の指導を受けながら苦闘の二日間でした。

受講された皆様も半ばを過ぎる頃には、先々を考慮して作業を行い、見事完成に至り素晴らしい出来上がりでした。末永く二松庵の景色となることと思います。

ご協力頂きました講師の先生方、材料をお願いいたしました中山造園資材様、事務局長を始め神造協役員の皆様、何にもまして今回の講習会にご参加いただきました延べ四十名の皆様に感謝申し上げます。有難うございました。

改修工事前

改修工事完成後